（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

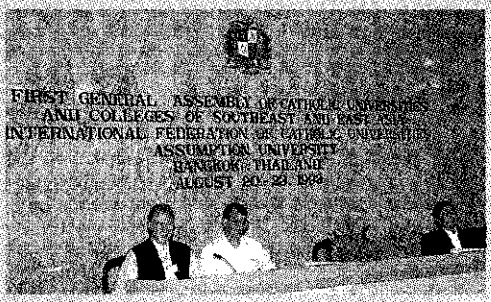
マイ ウエイ my way

カトリック大学の精神

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　31

世界の言語・文化・宗教学ぶ場

今回は、ちょっとした言葉の勉強から始めよう。英語では“Catholic”と“catholic”とを使い分けるが、大文字の方がキリスト教のカトリック教会を指し、小文字は（例えば“catholic taste”のように）「幅広い」という意味の形容詞である。さて私の話。授業で「カトリック大学の精神とは何か？」と尋ねたところ、ある1年生は「カトリックというと、教皇の絶対的権力による強力な思想支配のイメージが強い」と理解されていた。



ＡＳＥＡＣＣＵの最初の総会（タイ・バンコク）

世界中から名古屋に集まった神言会会員によって設立された南山大学には自然と「国際性」という特徴が生まれた（現在も専任教員の約2割は外国籍である。佐藤八寿子によると、外国人教師の存在感こそが「ミッション・スクール」を「あこがれの園」にしたという。「ミッション・スクール」（中公新書、2006年出版）。しかし、この都合の良い「出前国際化」だけではカトリック大学の精神を維持することはできないと私は思う。世界中のカトリック大学との継続的な交流があってはじめて、いろんな言葉、文化、そして宗教に共通の場を与えるという、カトリック大学の実に多面的な性格が浮かび上がってくるのである。

このような交流を促進するには国際的な組織は欠かせない。その意味で国際カトリック大学連盟（ＩＦＣＵ）のアジア・パシフィック地域支部としてスタートしたＡＳＥＡＣＣＵは、1993年の最初の総会から重要な役割を果たしている。韓国、台湾、インドネシア、フィリピン、タイ、オーストラリアからカトリック大学同士のリーダーが集まる。そのような場でこそ「カトリック大学の精神とは何か」の定義に着手することができる―と（1992年からＡＳＥＡＣＣＵ立ち上げの準備に関わり、現在会長として毎年の総会に出席している）私は思うようになった。「人間とは何か」を考える時も同様だろう。それは、自分の今までの経験に固執せず、本物のcatholic tasteを持って、同じ、いや、違う人間同士と一緒に考えてほしい不断に続く課題である。